

転勤はとても面倒ですが、後になってみれば又とない経験かもしれません、これから又野鳥を眺めて冬ごもりで、来春辺りは東京に戻りたいものと思っております。(6回生)

田 舎 も 田 舎

二 瓶 直 子

パリから帰国した或る有名な洋画家が、日本は緑が多過ぎて絵にならないと言った。私共が約6ヶ月間暮した米国・ノースカロライナ州東部は、松の平地林の間に農地の散在する低平な海岸平野で、全く画材に不適な場所であった。当地最大の都市グリーンビルは同州最大の煙草集散地で、大学町でありながら、商店街の端から端まで徒歩1分、日本人家族は我々だけ、醤油すら入手できない想像に絶する田舎町であった。所謂南部の、保守的な、事件の乏しい平和な社会であったが、外国人の私共には、大都市では味わえない心の交流を持つ事ができた。土曜日毎に、約300kmドライブし、同州東部の道は限なく通過した。土を採取し、動植物に触れ、又ヨットに乗ったり、ガレッジセールを通じて、上流階級からその日暮しの人達にも接触できた。公害も皆無で、water pollutionとは洪水を指し、洪水時には池と化した農地に流行のヨットが浮かび、女迄が魚釣りを楽しむ。強風時には畑の砂が飛び、一寸先の視界も妨害される。そんな日は皆家に引きこもっているらしい。

煙草の苗床の散在する農地を通過中、新築間もない家が全壊、隣家も台所を残して家半分が無く、而も周辺には材木、家具の破片すら見えない。ドライブを続けていると、約500m離れた林の、枝という枝にそれらが飛散し、ひっかかったりしていた。トルネードの跡であった。森の木々も引裂かれて生木が露出し、5ヶ月後でも風の通路を追跡できた。

低湿な海岸平野の砂地は曲者である。同州沿岸の海岸外洲アウトバックスを旅行中、砂丘の土壤断面の中に異常に白い層を発見、路肩に車を止めた。突然夫の「ダメダ！」の声。車輪は底無しに砂に埋まり、動けなくなっていた。炎天下、2人の乳幼児を抱えた母親が砂まみれになり立っているのを見て、次から次へと車が止まる。クレーン車を呼びに行っても数日後にしか来ない。そしてひどく高いと言って皆頭から砂を被りながら手伝ってくれたが、車は沈むばかり。結局チェーンを掲載した車の到来で無事事件落着。気をつけて行けと肩を叩いて行ってしまった。

子供連れでは文献捜しも容易でない。本屋は小さいのが2軒のみ。図書館にも行けぬ。幸い3週毎に移動図書館がアパートにやって来て、欲しい本を毎回10数冊ずつ持って来てくれ、次回の注文をとり雑談してゆく。

米国田舎ならではの心暖まる経験を断片的ではあるが紹介した。(15回生)